日本青年団新聞

Youth Post

2024 vol. 1
109巻第1号　発行2024年2月1日
編集・発行 日本青年団協議会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web https://www.dan.or.jp/

「場」あなたの居場所はどこにある

実家のような安心感のある居場所（特定非営利活動法人サンカクシャ・東京都豊島区）

サンタ事業で訪れた家の子どもたちと交流（岩手県葛巻町）

青研の最後に満面の笑みを見せる参加者たち（宮城県仙台市）

三輪会館近くの三輪神社で行われた納涼祭（納涼祭・兵庫県三田市）

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

ぼくらが紡ぐ100年の絆

～三輪のつながりを未来へ～（兵庫県三田（さんだ）市）

神戸随一の繁華街・三宮から電車に揺られること50分。兵庫県三田市の市街地に位置する三輪区では、100年を超える歴史を持つ**三輪（みわ）青年団**が活動している。1904年、三輪村の若者たちで結成された三輪村青年会が解散と結成を繰り返しながら現在に至る。団員およそ40名のうち、10～20代が半分以上を占める。

◆子供会との連携

青年団の他にも三輪区では、さまざまな団体が三輪会館を中心に活動している。青年団の年間行事の一つであり、毎年12月に三輪地区の若杉子供会と共催で行われるクリスマス会が、12月16日に行われた。子供会に所属する地区の小学生約40名が参加した。輪投げや射的など、複数のお楽しみブースが設けられ、そのうち一つを青年団が受け持った。加えて、最後のビンゴ大会は青年団主導で行われ、団員が参加者を楽しませた。子どもたちを楽しそうに見守る団員の姿と、会終了後に「楽しかった！」と声を弾ませる子どもたちの姿が印象的であった。子供会との連携は、現役の団員が小学生だった頃から活発に行われており、10年以上続いている。団員の中には、子供会で青年団と出会い、交流を重ねたことがきっかけで入団した者も多い。子供会との連携は、青年団にとって、未来を担う団員を発掘するチャンスでもある。これに限らず、子どもと地域をつなげることが、地域の未来を守ることにつながっていくのだろう。

サンタとトナカイに扮し参加者を楽しませた

◆自分たちが楽しいと思えることを

活動の中で大切にしていることは何か、との問いに「自分たちがやりたいこと、楽しいと思えることに全力で取り組むこと」と語ったのは団長の山見宝生（ともい）さん（23）。楽しいことの周りには、自然と人が集まる。青年団の活動を起点に地域の人々がつながり、そこに絆が生まれていくことを願い、活動を続けている。日頃の活動の様子を伺うと、周囲にはいつも地域の人たちがいる。何かのイベントで使えるかもしれないと機械を貸してくれる人、事業でピンチの時に助けてくれる人、打ち上げ会場を貸してくれる飲食店…。また反対に彼らの力を必要とする人もいる。楽しいことの周りには、自然と人が集まってくる。まさにそれを青年団員一人ひとりが体現しているのだ。

お問合せ：日本青年団協議会　TEL：03-6452-9025

４年ぶりの開催となった三田の夏の風物詩「三田まつり」。日々の活動資金調達のため、毎年青年団として出店している

大晦日から元旦にかけて行われた新春恒例餅つき大会。法被の背にある「絆」の文字は青年団が長年大切にしてきた合言葉だ

▶ユースポスト 108 巻 4 号に、下記の誤りがございました。謹んでお詫び申し上げ、ここに訂正いたします。
2 頁
誤）湧別（わくべつ）
正）湧別（ゆうべつ）

サンタが運ぶ人の心

～触れ合う場づくりも青年団の仕事～（岩手県岩手郡葛巻（くずまき）町）

12月25日、岩手県葛巻町。町議会議員選挙の翌日、町の青年団である葛巻町青年連合協議会は「サンタが家にやってくる」事業を実施した。

事業の開始は少なくとも15年以上前にさかのぼる。12月になると青年団は「保護者からプレゼントを預かって、サンタやトナカイの格好でお宅を回り子どもにプレゼントを渡す」サンタ事業が、全国的に広がっている。しかし葛巻のサンタ事業は一味違い、自分たちでプレゼントを用意して渡す。今年はお菓子や塗り絵などを用意し、過去には酪農のまち葛巻ならではの特産品としてヨーグルトをプレゼントしたこともあったという。今年はコロナ禍後ということもあって、40軒近いご家庭の子ども約80名から申し込みがあった。団員一同「コロナ禍明けだからか申し込みが多くて嬉しいね」と話し合った。

当日は15名の団員が5班に分かれておお宅訪問した。事業後の飲み会では事業の話もありつつ、仕事のことや趣味のことなど話題が多岐に及んでいった。会長の山形駿さん（31）は、「団員も子どもの反応をみて喜んでいた。寒いからと差し入れにコーヒーをいただくなど、まちの人との強いつながりを大事にしていきたい」と話した。

訪問先のお宅でプレゼントを渡す団員

お問合せ：葛巻町青年連合協議会会長　山形駿さん　TEL：080-2818-3985

仲間と集う喜びを

～互いを認め、語り合う時間～（宮城県仙台市）

去る1月20日～21日、**宮城県青年団連絡協議会**主催の第46回宮城県青年問題研究集会が、宮城県青年会館（エスポールみやぎ）で開催された。県内外から、15名の講師・参加者が参加した。

1日目は、体験研修としてレジンでストラップを作成した。その後、相手の思いを引き出すために聞き手が気をつけること、をテーマに一人ひとりが3分間の自己紹介などを行う、参加型の基調講演に向き合った。聞き方一つで相手の話し方が大きく変わる。翌日の分科会に向け、貴重な時間となった。

2日目は、朝から2つの分科会に分かれて日頃感じている悩みや課題を共有し、話し合った。ある参加者が最近の悩みを打ち明けた次の瞬間、他の参加者からの一言で少しスッキリとした表情を見せる。また別の参加者は、自分の思いを言葉にして話したことで、改めて自分自身を理解することができた。一人きりで黙々と考えても得られない瞬間が、仲間と共に語り合う時間の中にあるはずだ。

来る3月2日～3日には、全国まちづくり若者サミット2024が東京で開催される。参加者らは事業終了後、「次は全国の仲間たちと語り合いたい」と興奮冷めやらぬ様子で語った。

試行錯誤しながらストラップ作成に取り組む参加者

お問合せ：宮城県青年団連絡協議会　MAIL：mail_seinen_miyagi@yahoo.co.jp

地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。前号から始まった新連載「地域活動ラボ」。二回目となる今回は、滋賀県日野町連合青年会と大分県舞鶴町青年会が取り組む機関紙づくりの取り組みについて紹介する。

◆教宣活動と機関紙づくりって何?!

2022年度全国地域青年「実践大賞」
審査員　棚田　一論（かずのり）
（日本青年団協議会事務局長）

青年団の活動の一つに教宣活動がある。教宣活動とは教育宣伝活動の略称で、青年団や労働組合、政党などの団体に所属している方や、関わったことがある方にとっては馴染みある言葉である。「自分たちの考え方を、たくさんの人に伝えるために、いろいろなやり方を取り入れて活動をすること」と言い換えられるだろう。しかし、そうした団体に縁がなければ、目にする機会は少なく、業界用語とも言える。

教宣活動の一環として発行される「機関紙（誌）」と「広報紙（誌）」は、内容が似ている。中でも、組織に属する人を対象にする機関紙に対して、対象を特定しないのが広報誌だ。それぞれに長短があるため、青年団によってその位置づけは異なる。

◆仲間との絆を深め、地域に届ける機関紙

日野町連合青年会は、まもなく結成70周年を迎える団体である。団員数は少ないながら、町民駅伝大会や年賀状展などの活動を、連綿と受け継ぎ活動している。その活動の一つが機関紙「ひのせいねん」だ。機関紙発行に取り組みはじめたのは数十年前のこと。以来取り組み続けられており、月刊から季刊へと形を変えながらも絶えることはなかった。発刊以来こだわっている点は4つ。「団員全員で取り組むこと」「手書きで作成すること」「見出しを工夫すること」「地域とつながること」である。

審査会では、長年にわたり継続して取り組まれていること、また団員全員で作っていることへの評価が高かった。コロナ禍でも発行し続けている、継続的な取り組みとしても審査員から好評だった。「デジタルがここまで普及する中で、ここまで手書きにこだわっていることに、情熱を超えた執念すら感じる」との声もあったほどである。「ひのせいねん」を毎年読むことを楽しみにしている審査員もいる。

◆クロスメディアで地域を盛り上げる広報誌

舞鶴町青年会は、一度は解散したものの2015年に復活した。お祭りの企画や運営、郷土芸能の普及啓発などを中心に活動している。

新型コロナウイルス感染症拡大により、活動を縮小せざるを得ない中で、町内に明るい話題を届けたいとの思いから広報誌の発行とWebサイトの運用をスタートさせた。

これまで実践大賞の応募には、こうした二つの媒体を並行して使った取り組み（クロスメディア）の応募がなかった。そのため、審査員からは、ぜひ他地域の青年団もこうした手法を参考にしてほしい、という声があがった。評価が高かった点がもう一つある。子どもからお年寄りまで、青年会の活動を知ることができるよう考慮したことだ。ご年配には紙媒体、若い世代にはSNS。それぞれが得意な方法から青年会を知ってもらえるようにしたことも、高い評価を得た。

◆活動の先に獲得したい成果を描く

日野町連合青年会の機関紙づくりは、仲間との結束を高めつつ、全戸配布にこだわった。この活動に対して、舞鶴町青年会のクロスメディアは、地域の隅々まで情報を届けるために、多層的な世代へのアプローチに取り組んでいる。両団体に共通しているのは、自分たちのやり方で得られる成果を理解していることと、教宣活動を通して地域とのつながりを獲得していることだ。

いま、青年団は地域活動を通して、さまざまな課題に直面している。それぞれの活動の長短を学びながら、自分たちの団体にとって適切な取り組みを始めてもらいたい。こうした活動は地道であるが、団体で活動する上ではかけがえのない取り組みである。コロナが感染法上5類になり、地域がどんどんと動き始めている。この機を逃すことなく、前向きに活動を続けてほしい。

●お問合せ：日本青年団協議会
TEL：03-6452-9025

「舞鶴町青年会新聞」第９号

2022年3月27日発行
「ひのせいねん」第361号

「舞鶴町青年会新聞」第10号

舞鶴町青年会Webサイト

「舞鶴町青年会新聞」と「ひのせいねん」の比較表

		教宣大賞	教宣奨励賞
特徴	2022（令和4）年度全国地域青年「実践大賞」受賞		
	項目	「舞鶴町青年会新聞」 舞鶴町青年会 （大分県）	「ひのせいねん」 日野町連合青年会 （滋賀県）
団体	団体発足年	2015（平成27）年	1955（昭和30）年
	団員数	11人	4人
	活動場所	大分市舞鶴町及びその周辺地域	日野町連合青年会事務所
	活動内容	長濱祭、ハマの井戸端会議、 伝統文化体験ほか	町民駅伝大会、町民年賀状展、 氏郷祭りほか
誌面	種類	広報誌	機関紙
	制作経緯	行事開催の事前告知のチラシだけではなく、 活動の成果や組織の魅力を もっと知ってもらうため	自分たちの活動を町民の方々に知ってもらうため。私たちのことを知らない人たちに 私たちの存在を知ってもらうため
	執筆者	編集長（会長）１名、広報担当１名 （執行部７名のうち）	団員全員
	読者層	地元住民	地元住民
	発行頻度	年4回	通常版　4回/1年 駅伝版　2回/1年
	発行部数	600部	6,500部
	配布方法	紙面配布（自治会協力の回覧 ・会員による集合住宅へのポスト投函）／ 青年会専用Webサイト・SNSでの公開	紙面配布／ Instagramでの公開
	サイズ	A4	B4　更版紙
	書き方	PC入力	手書き

（２０２３年１月２１日時点）

原稿用紙を前に、企画を考える日野町の団員たち

▼荒井　佑介　氏（写真左）
あらい　ゆうすけ。埼玉県出身。NPO 法人サンカクシャ代表理事 東京都豊島区を中心に 15 歳から 25 歳くらいまでの若者の居場所作り、しごと・住まいを支援。 学生時代からホームレス支援、子どもの貧困問題、若者支援に取り組んでいる。

▼日本青年団協議会会長　中園　謙二
なかぞの・けんじ。1980 年生まれ。岡山県倉敷市在住。2008 年、岡山県青年団協議会に入会。日本青年団協議会役員を経て、2020 年より同会長。

リーダーと語る

コスパ重視だけではできない

社会の最前線で活躍する方と語り合い、あらゆる角度から地域を見つめる本企画。今回は、都内を中心に若者の居場所として、フリースペースやシェアハウスを運営する NPO 法人サンカクシャの代表理事を務める荒井佑介氏と対談する。

同年代の若者と関わり、気がついた発見と課題に対し、仲間と乗り越え、解決の糸口をどのように見つけているのか――。

◆ホームレスとの会話がきっかけ

（中園）２０１９年に発足し、コロナ禍を乗り越え事業を拡大してきたそうですね。若者支援を始めたきっかけについて教えてください。

（荒井）大学からの帰り道、道端に座り込んでいたホームレスの人に声をかけたことが始まりです。具合が悪いのかと心配して声をかけてみたら、身の上話が止まらなくて（笑）終電がなくなる時間になったので、帰ろうとしたら「また来いよ」と言われました。学生生活よりも興味が惹かれてしまい、「また来ます」と即答したのを覚えています。そこからは毎週のように通い、多くのホームレスの方に話を聞きました。話を通じて、20～30代が意外と多かったのが印象的でしたが、他にも彼らの共通点には、幼少期の家庭環境やトラウマが大きく影響していたこともわかりました。青年層への支援のためには、中高生への支援も重要だということに気づかされたんです。

◆実家のような居場所

（中園）ここ、豊島区にある居場所「サンカクキチ」には、アットホームな雰囲気を感じました。スタッフものびのびと働いていて、部屋にはゲームや漫画、クッションまで…、非常にリラックスできる空間ですね。

（荒井）ここにある物は、スタッフや協賛企業、支援者からの「もらいもの」で成り立っています。分野にとらわれず雑多なところも実家のような雰囲気で落ち着くのだと思います。私たちは４軒のシェアハウス「サンカクハウス」も運営しています。その家具は、大手家具メーカーから支援いただいています。支援いただけた分、新しいハウスができた時は、自分たちでそのメーカーに家具を買いに行きました。

（中園）支援から生まれたご縁ですね。「もらいもの」の規模に驚きましたが、支援者を増やすために努力されたことはありますか。

（荒井）とにかくたくさん話しました。私たちがやっていることは、どうしてもコストがかかります。しかし、お金のことだけを考えて活動を変えると、必ず現場が置き去りになってしまいます。私たちの活動は数字では伝わり難いので、支援してほしい方々一人ひとりに活動の中身を伝えていきました。

（中園）自主財源の獲得は、どこの団体も苦労していると思います。教育や支援というのは、明確な成果が分かりづらい。数値化しにくい分、言葉で相手に伝える力が重要になってきますね。

◆この縁さえあれば

（中園）支援のお願いをするときに、注意していることはありますか。

（荒井）あまり深く考えていませんでした。ただ、この活動を通じて感じたことは「なんとか生きていけるだろう」ということです。路頭に迷っても誰かが助けてくれるという関係性を、いろいろな方々と持てたのは、この業界の特色です。一方で、ボランティアで協力してくださる方々のやりがいばかりを搾取してもいけないと思っています。ボランティアの使命感は、達成感にもつながりますが、それだけでは立ち行かなくなります。この考え方が根底にあるのかもしれません。

（中園）一度会うと、関係性がずっと続くのは青年団と一緒ですね。自治組織だからこそ、自主財源の確保は課題です。最後に、全国の青年団に向けてメッセージをお願いします。

（荒井）勝手ながら、私たちは同業者だと思っています。全国で高齢化が加速し、今の20～30代が重要な社会の担い手になってきます。普段の活動でも、都会だけではなく、地方で短期間の体験活動を行うようになりました。自然や緩やかな時の流れに触れる体験は、都会生活だけでは補えない経験になると考えています。今は、活動の範囲を都会から地方へ少しずつ広げようとしているところです。都会と地方の相互関係は、それぞれにとって大切な役割を果たしていくと確信しています。青年団のみなさんも共に頑張りましょう。

未来をつむぐエネルギー　TOKYO GAS GROUP

脱炭素社会実現へ――
想像を超える。

石油や石炭が主なエネルギーだった
1960年代、エネルギー需要の拡大や
大気汚染などの社会課題がありました。
その時、私たち東京ガスグループは、
優れた環境性と経済性を備えた
「天然ガス」を導入し、
東京に青い空を取り戻しました。
そして今、私たちは、
脱炭素社会実現に向けた
新たな取り組みをスタートさせています。
「想像を超える」新しいエネルギーの
かたちを実現することで、持続可能な
地球環境に貢献します。
私たちの「CO_2ネット・ゼロ」への
取り組みにご期待ください。

東京ガスグループの
取り組みはこちらから▽

OTHERS
～地域で活動する若者たち～

vol. 2

ＮＰＯ法人ＫＥＹＳ

地域には青年団のほかにも若者団体が数多く存在する。多様化が進む社会で、さまざまな団体や立場の人たちと青年団とが力を合わせていけるよう、本企画ではその運営や組織体系、その特色などを紹介していく。

今号では、島根県の松江市で地域の中学校を卒業した高校生が、中高生が主体となり地域づくりを行うＮＰＯ法人を立ち上げ、地域の大人を巻き込みながら活動を行っているＮＰＯ法人ＫＥＹＳを取り上げる。

事務局長の藤原睦己（むつき）さん

平成 16 年生まれ。令和２年に高校生主体の NPO 法人 KEYS を設立し令和４年３月まで理事長を務める。令和４年４月からは事務局長として高校生をサポートしながら自らも公民館活動に取り組む。島根大学青少年育成アドバイザー、松江市湖南中学校学校運営協議会委員、乃木地区青少年育成協議会理事。

大人も子どももいっしょになってつくったクッキーを食べながら、謎解きに挑戦。

◆中高生が地域の主役

ＮＰＯ法人ＫＥＹＳ（以下、ＫＥＹＳ）は、島根県松江市の湖南中学校区を拠点に活動している。２０２０年に湖南中学校を卒業した高校生を中心に設立された。

その団体名は、その意味は「湖南（Konan）中学校区で地域活動に尽力する（Effort（エフォート））ことによって力をつけていく（Empowerment（エンパワメント））青少年たち（Youths（ユース））」という意味である。また、ＫＥＹＳ＝鍵なので、青少年が地域社会のキーパーソンになれるように、という意味が込められている。現在は松江市内外８校の高校・高専に通う25名の高校生・高専生たちが正会員として所属している。特徴的なのは、正会員になれるのは高校生だけである点。高校を卒業すると同時に退会し、事務局として高校生たちの活動を支える側へ回ることとなる。

◆中学生が大人をリードする

地域でさまざまな活動を行っているＫＥＹＳの中でも特徴的な活動として、毎年１月に中学２年生を対象に「地域リーダー育成研修会」を開催している。この研修会は学校や地域を引っ張るリーダーとしての力を養うためのものである。中学生・高校生・地域の大人の三者が一緒になって、「自分たちが住む地域について考えてみよう」とグループワークをしながら、地域のことを考える取り組みだ。研修会では、中学生から「もっとこういう地域にしたい」という意見が活発に出された。それに触発されて、高校生、大学生、大人もどんどん意見を出す好循環が生まれている。

◆中学生のやりたいを形に

以前は研修会で出た良い意見も、発表して終わりだった。そこで問題意識をもち、一昨年からは研修会を受けた取り組みとして、中学生を主体とした「こなんフェスタ」をはじめた。

今年度は、中学生からお菓子づくりに挑戦したい意思と、「自分で謎解きの問題をつくれるから、地域の人に解いてもらいたい」という熱い意見があり、当日のプログラムが決まった。大人の参加者も中学生がどういう大人に来てもらいたいかを話し合った。普段は中学校と関わりのない大人にも来てもらおうと、積極的に呼びかけを行ったところ、多くの大人も参加したことで、地域の交流が深まった。

ＫＥＹＳの事務局長を務める藤原睦己さん（20）は活動を通じて「若い人もひとりの社会の構成員として扱ってくれて、みんなで支え合える地域社会をつくっていきたい」と思いを語った。

毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊 1957 年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体 741 円＋税

旬報社　〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 544 中川ビル４F
TEL03-5579-8973　FAX03-5579-8975　http://www.junposha.com/

日本青年館ホール　検索
「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードよりお読み取りください。
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL:03-6447-5660
ACCESS：東京メトロ銀座線
外苑前駅2b出口より徒歩5分

私たちは日本の社会教育と
全国の青年団を応援しています。

OPINION　一期一会

一期一会とは、「一生に一度だけの機会」という意味の言葉である。一期は「一生・一生涯」を意味し、一会は「一度の出会い」を意味する。つまり一期一会とは、「生涯に二度とない出会い」であるということだ。当たり前のことであるがゆえに、忘れがちではないだろうか。この言葉は、茶道の心得から来たことわざで千利休の弟子であった宗二の著「山上宗二記―茶湯者覚悟十体」にある「一期に一度の会」が語源とされている。

新年を迎えたその日、能登半島を震源地として襲った令和６年能登半島地震。突然の家族や仲間、友人との別れに日本中が肩を落とした。災害によって被災地では多くの人々が困難な状況に立たされることになった。しかし、彼らは目の前の現実に悲観しながらも行動し、物資の配布や避難所での支援などを通じて被災者でありながら、被災者のために、と動いた。この積極的な姿勢は、具現化された一期一会の精神に他ならない。例え知らない人であってもその出会いを大切にし、一度の縁を未来につなげていく。青年団員もまた巻き込まれながら、生み出してきた「居場所」という空間は、災害による混乱の中であってもこの精神を実践している。すべての出会いや体験は「一生に一度」しかない。当たり前を特別に思い、特別であることを当たり前にしていく。それが私たちが向かう生きることを楽しく、豊かに過ごすことができる社会の実現ではないだろうか。

●令和６年能登半島地震における
募金を開始いたしました　➡➡
QR コードよりご確認ください

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.56

地域との絆を深める

鈴木　洋志（ひろし）さん（38）
（静岡県・有度（うど）青年団）

静岡、心のふるさと

鈴木さんは、職場の先輩から誘われ青年団の飲み会に参加したことがきっかけで、青年団に入団した。最初はお酒目当てで通っていたものの、いつの間にか団に所属していたという。地域の行事やおまつりに参加していく中で、有度青年団の魅力に引き込まれていった。

入団してよかったと感じる瞬間は、世代を超えた新しいつながりができること。また、地元に住んでいながら全く知らなかった地域の行事やおまつりに参加できることだという。青年団の事業で特に楽しんでいるのは、季節の行事への参加だ。ハロウィンやクリスマス事業に参加する子どもたちやその両親と交流している時、普段の自分とは違うハイテンションな自分に出会うことができる。普段はクールな彼が、新しい自分に出会うことができる場所が青年団なのだ。土日も仕事のため、行事との両立の難しさを感じているが、これからもできる限り活動を行っていきたいと語る。

編集後記

この度、新たな命を授かることになり、今後の働き方について考えさせられました。日青協ならではの仕事が、身重の私にとって負担になったことは、気づきたくない事実でもあります。それでも本号の発行を迎えることができたのは、周りの方々に助けられたから。年始から続く地震でも思いましたが、仲間と共に達成するという幸せを、４月まで噛みしめていきたいと思います。（し）

NISSEIKYO

最新の情報はこちら

https://www.facebook.com/nisseikyo01/

はらぺこ青年団

地元の名物を支局員が青年団のエピソードとあわせてご紹介。

岡山県青年団協議会行きつけのお店「お食事　家夢（かむ）カム」。このお店は居酒屋と焼き肉が楽しめるお店で、活動拠点の岡山県青年館からも近く、活動が長引いた時によく訪れます。私のおすすめ「とろろの鉄板焼き」は、出汁ととろろがお酒とよく合い、来店した際には必ず注文します。議論が膠着状態になった際には、ご飯を食べながら話すことで、解決につながります。また、定期大会前日には、新旧役員とお酒を飲み交わし二日酔いで当日を迎えるのがお約束。団員の憩いの場であるこのお店をこれからも大切にしていきたいと思います。

●花房功基（こうき）支局員（岡山県青年団協議会）より投稿